

7月12日 (日) サムエル記上 19章	「彼(サウル)の上にも神の霊が降り、彼は預言する状態になった…」(23節)。ダビデに対する嫉妬と憎悪にかられたサウルは彼を殺そうと諮るが、「神の霊」がそれを阻み、サウルは預言する状態になる。預言とは神の言をあずかること。神の言を受ける時、人は神の御旨に動かされる者とされる。主日礼拝を通し、一人ひとりが「神の霊」に動かされる者とされて。
13日 (月) サムエル記上 20章	「ヨナタンは言った。『安らかに行ってくれ。わたしとあなたの間にも、わたしの子孫とあなたの子孫の間にも、主がとこしえにおられる』」(42節)。私たちが生きる世界は悲しいことに、人と人との信頼関係を破壊する悪魔的力があふれている。そのような世界の中で、「あなたとわたしの間に主はとこしえにおられる！」と語り合える信仰の友に勝るものはない。
14日 (火) サムエル記上 21章	「普通のパンがなかったので、祭司は聖別されたパンをダビデに与えた」(7節)。祭司アヒメレクは日頃から、ダビデの主に対する信仰と王サウルに対する忠誠を見ていたので(22:14 参照)、いつもと違うダビデの態度に戸惑いながらも、自分の裁量でダビデに聖別されたパンを与えた。日頃の主を尊ぶ信仰と人に対する忠誠が、人の心を動かしていく。
15日 (水) サムエル記上 22章	「だが、王の家臣は、その手を下して主の祭司を討とうとはしなかった」(17節)。ダビデに味方した祭司アヒメレクを殺せと命じるサウルに家臣たちはその良心ゆえに従わなかった。しかしながら祭司アヒメレクたちはみんな殺されてしまう。理不尽な王の狂気に、家臣たちは天を仰いで嘆いたことだろう。もし家臣と同じ立場に立たされた時、わたしならどうするのか。

16日 (木) サムエル記上 23章	「サウルの子ヨナタンがホレシヤにいるダビデのもとに来て、神に頼るようにとダビデを励まして、言った。『恐れることはない』」(16－17節)。神を畏れない、理不尽な怒りがあふれる現実の中で、ヨナタンは「神に頼るように」と励ました。信仰の友のこの言葉にダビデはどれだけ励まされたことだろうか。私たちが互いに「神に頼る信仰」を励まし合う者でありたい。
17日 (金) サムエル記上 24章	「わたしの主君であり、主が油を注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されない。彼は主が油を注がれた方なのだ」(7節)。前章のヨナタンの「神に頼るように」という励ましが、ここでダビデを信仰に固く立たしめているように思う。主への信仰に生きる者にとって、誘惑あふれる世界の中で信仰の友ほどありがたい存在はない。
18日 (土) サムエル記上 25章	「主は、今日、あなたをわたしに遣わされた。…わたしが流血の罪を犯し、自分の手で復讐することを止めてくれた」(32－33節)。サムエル記を読むと、「信仰の人ダビデ」が彼一人の力で信仰を固く保っているのではなく、周囲の人々の誠実、友情、信仰に支えられ守られている姿が見えてくる。今日、わたしを罪から遠ざけてくれる友の祈りを知る者とされて。
19日 (日) サムエル記上 26章	「サウルはダビデに言った。『わが子ダビデよ。おまえに祝福があるように。お前は活躍し、また、必ず成功する』ダビデは自分の道を行き、サウルは自分の場所に戻って行った」(25節)。サウルの半生は部下ダビデへの嫉妬に囚われた、平安なき日々だったが、この夜、ダビデを祝福できてよかった。このあとサウルはダビデと再会することなく戦死するのだから。